【香川県教育委員会教育長賞】

吃音～百人に一人の私？～

土庄町立土庄中学校　一年　木元夏菜

私が吃音だと気づいたのは、小学校に入学してからです。自己紹介の場面でみんなと話し方が違うのを感じました。言葉が出ない。言いたいことが頭に浮かんでいるのに詰まって声にならない。どうしたらいいんだろう。その気持ちで余計に焦ってしまい、「名前は…、き、き、き、き…」私の口から発する言葉はこの一文字だけでした。自分の声がいつもより出ない。不安を抱えながら何とか「きもと…なつなです」と言えたけど、何分かかったのか分からない。ただ、達成感はありました。自己紹介に限っては、担任の先生が一・二年生、三・四年生、五・六年生の三回替わっただけだったので、少ない回数で済んでラッキーでした。授業の発表、音読はどうしよもなく、嫌でしょうがなかったです。不安になるのは今の中学校でも同じでした。きっとこの先もこの思いはもち続けるんだろうな。暗い気持ちがどうしても湧いてきてしまいます。

一方で、小学校の六年間はクラスのなかまや先生に恵まれていたと思います。特に、三年生から六年生のときは、私が発表するときはみんなが何も言わず待ってくれたし、早く話せよオーラも感じなかったです。そのことがとてもうれしくて、みんなにはとても感謝しています。笑われなかったこともありがたかったです。吃音でいじめられることはなく、そのおかげで人と接することが好きで、おしゃべりも大好き。最初の言葉に詰まっても、みんなはいつも待ってくれるから大好き。口ではちょっと恥ずかしいから言えないけど、私はみんなにいつも感謝していました。

しかし、理解してもらえていない他学年の人にからかわれたことも

ありました。下校途中に高学年の女子三人に威圧される感じで「何かしゃべってみてよ。」「なんでそんな話し方なの？」と言われました。私が「嫌です。」「わかんない。」と返してもやめてくれず、帰り道をふさがれてしまいました。そのときは、タイミングよく帰り道が途中で別れたので無事に帰ることができました。このときのことは私の中で嫌な、怖い思い出として残っています。私は絶対に人をからかわない。心に傷を負ってしまうことを身をもって知っているから。どんな子でも優しくしていきたい。そんな決心をしていました。

今は吃音の症状はほんの少しよくなっていますが、リハビリとして、言語聴覚士さんとお話をしていくつもりです。まだどんなことをするかは決まっていないので、少しの不安と少しの期待があります。症状がさらによくなったら、何も悩まずにたくさん話してみたい。早くリハビリに行ってみたい気持ちがあります。

最後に、私が願うのは、吃音を正しく理解して個性として受け止める人が増えてくれれば、吃音の人たちは自分の考えをしっかり相手に伝えることができると思います。たとえば「待つ」ことは、私に乗り越えようとする意欲をもたせてくれます。不安な気持ちを和らげて心にゆとりをもたせてくれます。吃音がある人もない人も、みんな同じ対等な人間であるはずで、私はコミュニケーションが豊かに広がって、お互いが尊重し合えるような関係をつくっていきたい。その努力をしていきたいと考えています。